

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月11日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20390551

研究課題名（和文）乳がん患者のサポートグループの効果を高めるプログラム構成と有効性に関する研究

研究課題名（英文）Effectiveness and program composition in support group to enable breast cancer survivor to become wellbeing

研究代表者

増島 麻里子（MASUJIMA MARIKO）

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：40323414

研究成果の概要（和文）：本研究は、乳がん患者のサポートグループプログラムの構成内容と短期・長期的な効果を明らかにし、日本の乳がん患者の生活の質向上に効果的なプログラムの確立を目指すものである。2004年に研究者らが開発した乳がん患者のためのプログラム「ほっとカフェ」に参加した乳がん体験者と運営者を対象に、面接調査法と質問紙調査法を用いてプログラムに必要な内容や運営方法、プログラム参加から1年後までの効果の推移を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to clarify the program effect of short-term and long-term and the composition in support group to enable breast cancer survivor to become wellbeing. The researchers have developed "Hot cafe" program for breast cancer survivor in 2004. We completed in-depth interviews and questionnaire to participants and staff of our program and revealed the changes in effect until one year after program.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	2,100,000	630,000	2,730,000
総計	5,500,000	1,650,000	7,150,000

研究分野：がん看護学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：乳がん・がん看護・サポートグループ・プログラム評価・がんサバイバー

1. 研究開始当初の背景

サポートグループは、欧米諸国ではがん患者の抱く抑うつや死への不安等の心理社会的苦痛に対する集団介入の1つとして活発に行われ、がんの診断期、治療期、終末期のあらゆる時期の患者とその家族の重要なソーシャルサポートとして位置づけられている。我が国では、欧米諸国のサポートグループの活動が徐々に浸透し、1990年代からがん患者を対象としたサポートグループが行われはじめた。多くのプログラムは、欧米の既

存のプログラムを土台にしているが、日本のがん患者に効果的なプログラムとして妥当なのかは明らかにされていない。また、乳がん患者の場合、初発と再発では、身体・心理的状态や相互交流で分かち合う気持ちや情報は異なることは容易に推測される。以上から、研究者らは、日本の乳がん患者の現状に則した日本独自のサポートグループプログラムを構築し、検証する必要があると考えた。

研究者らは、開発したプログラムを2004年から開始し、サポートグループの運営に携

わるスタッフの関わりも成熟したことから、プログラムを提供する質は安定したと考える。現在行っているサポートグループのプログラムの構成と有効性を詳細に検証することは、がん看護領域において日本の乳がん患者に特化した看護介入の効果を示すエビデンスを提供するといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、乳がん患者のサポートグループプログラムの構成内容および短期・長期的な効果を明らかにし、日本の乳がん患者の生活の質向上に効果的なサポートグループプログラムを確立することである。研究期間内に明示する内容は、以下の3点である。

- (1) 乳がん患者のサポートグループに参加する患者の体験を明らかにする
- (2) 乳がん患者のサポートグループのプログラム介入直後および介入後長期的な効果を、質的および量的な側面から明らかにする
- (3) 上記より、乳がん患者の生活の質向上に効果的なサポートグループのプログラム構成と有効性を明らかにする

3. 研究の方法

以下の調査は、千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を受け実施した。

- (1) 乳がん患者サポートグループプログラム参加者の体験に関する調査

①対象者

対象候補者の選定基準は、平成20年度乳がん患者がサポートグループ「ほっとカフェ」に参加した者のうち、a. 4回のセッションから構成されるプログラムに2回以上参加した者、b. 面接が可能な身体・心理的状态であると判断される者、c. 研究の承諾が得られた者、全ての基準を満たす者とする。

②調査方法

各サポートグループプログラム終了から1～2ヵ月以内を目安として、半構造化質問紙に基づく30～60分程度のインタビューを行う。調査内容は、a. サポートグループに参加した患者の体験および変化、b. 体験および変化に影響したと患者が考えるサポートグループプログラムの内容、c. 参加者との相互交流における気持ちの分かち合いや情報交換で有用であったもの、d. 患者が望むサポートグループプログラム内容と構成、e. 患者の基礎情報(年齢、同居家族数、就業の有無、乳がんの診断時期と現病歴、現在の体調、会に参加した動機)である。得られた資料は、質的帰納的に分析する。

- (2) 乳がん患者サポートグループプログラムの短期的な評価に関する調査

①対象者

平成22年度および平成23年度に2クールずつ開催するプログラムの参加者のうち、a. プログラム4セッションのうち1セッション以上に参加した者、b. 質問紙調査およびインタビューが可能な身体・心理的状态であると判断される者、c. 研究の承諾が得られた者、全ての基準を満たす者とする。

②調査方法

セッション終了時に5分程度で回答可能であり、各セッションの内容に対応した質問紙調査を行う。主な調査内容は、a. プログラム運営者である看護師による情報提供の理解度および話し合いの満足度について5段階尺度(5:十分理解または非常に満足、1:全く理解できないまたは不満足)による評価、b. プログラムに対する要望や感想等の自由記載による主観的評価である。

- (3) 乳がん患者サポートグループプログラムの長期的な評価に関する調査

①対象者

平成22年度および平成23年度に2クールずつ開催するプログラムの参加者のうち、a. プログラム4セッションのうち1セッション以上に参加した者、b. 質問紙調査およびインタビューが可能な身体・心理的状态であると判断される者、c. 研究の承諾が得られた者、全ての基準を満たす者とする。

②調査方法

質問紙調査および面接調査を行う。質問紙調査においては、107～116項目から構成される質問紙を作成した。質問項目の内訳は、プログラムの目的の5つの下位項目「生きる活力が高まる」「自分自身でやっていける感覚が強化される」「情緒的な安寧が得られる」「適切な資源を獲得する力が高まる」「自分の状況を新たな視点で捉えることができる」に見合い信頼性・妥当性の確保が得られている既存の質問紙5種類(a. Mental Adjustment to Cancer scale (MAC) 日本語版、b. 主観的健康感尺度 (WHO SUBI)、c. 外傷後成長尺度日本語版 (PTGIJ)、d. 健康関連QOL尺度 (SF-8)、e. がん患者の自己効力感尺度)より98項目、加えてプログラムの目的に見合う独自に作成した9項目、患者の基礎データ9項目である。

質問紙の回答を依頼する時期は、a. ベースライン: プログラム第1セッション開始前、b. 第4セッション終了後、c. 第4セッション終了3ヵ月後、d. 第4セッション終了6ヵ月後、e. 第4セッション終了1年後、の計5回とする。質問紙および返送用封筒一式は、期日ごとに回答を依頼する数日前に対象者へ送付する。

インタビューは、プログラム終了1年後の時点から1～2ヵ月以内を目安として、半構造化質問紙に基づく30～60分程度のインタ

ビューを行う。面接調査の研究協力依頼は、プログラム終了1年後の第5回目質問紙調査時に対象候補者に書面にて確認する。

(4) 乳がん患者サポートグループプログラムの運営者による評価

①対象者

平成22年度および平成23年度に開催したプログラムの運営スタッフで、4回のセッションのうち1回以上参加し、研究承諾が得られた者とする。

②調査方法

研究参加の同意が得られた対象者に半構造化質問紙によるグループインタビューをプログラムの各セッション終了後に約1時間ずつ実施する。インタビューガイドの概要は、セッションのテーマに沿った情報提供を行うことができたか、乳がん体験者のグループの話し合いを促進することができたか、参加者が安心できる会場を設定することはできたか等である。話し合いの内容は、対象者の承諾を得て録音し、了承を得られない場合は筆記する。話し合われた内容全てをデータとする。

(5) 乳がん患者サポートグループプログラムの構成要素と有効性に関する調査

「ほっとカフェ」プログラムの課題と展望を検討するために、サポートグループプログラムを先駆的に実践する英国においてフィールドリサーチを行う。

現地では、サポートグループプログラムの構成要素であるプログラム内容や運営方法、サポートグループ実践における看護職者の役割、プログラムの評価方法について、運営者から情報収集を行う。

4. 研究成果

(1) 乳がん患者サポートグループプログラム参加者の体験に関する調査

対象者は19名であり、プログラム参加時の平均年齢は50.8歳(30歳代~70歳代)で50代が最も多く、術式は乳房切除術7名、温存術13名、術後経過年数は平均20.4ヶ月(中央値10、最長127ヶ月)であった。

対象者の体験と変化は、4つの内容<スタッフの情報提供による参加者の体験と変化>、<グループの話し合いによる参加者の体験と変化>、<サポートグループに参加したことによる参加者の体験と変化>、<サポートグループの構成や運営に関連した体験>と31の下位項目の内容が明らかになった。下位項目の内容には、看護師の情報提供により<乳がんに関する知識を再確認し新たな知識を得て、自分で病気に対処していけると実感する>、<得た情報だけでは自分固有の問題解決にはつながらないと感じる>、参加

者同士の話し合いにより<同じ乳がん体験をしているからこそ、自分を繕うことなく家族にも言えない本音を話せる>、<乳がんと付き合いながら生きていく将来に明るい見通しがもてる>、<自分と他の参加者の状況が異なり、違和感や妬ましさを感じる>等であった。体験や変化に影響するプログラム内容は、少人数制であることや同じ参加者が継続して話し合えるグループ構成等であった。

(2) 乳がん患者サポートグループプログラムの短期的な評価に関する調査

平成22年度に開催されたプログラム2回(春開催、秋開催)の参加者のうち、研究参加に同意の得られた対象者17名の回答を分析した。プログラム参加時の平均年齢は47.5歳(30歳代~60歳代)、術式は乳房切除術が12名、乳房温存術が5名、術後経過年数は18.1ヶ月(2~181ヶ月)であった。

①プログラム参加者の情報提供の理解度および話し合いの満足度

参加者の情報提供の理解度の平均は、春開催4.2、秋開催4.2であった。また、参加者の話し合いの満足度の平均は、春開催4.7、秋開催4.2であった(表1)。

表1: プログラム参加者の情報提供の理解度および話し合いの満足度

評価項目 セッション	情報提供理解度		話し合い満足度	
	春開催	秋開催	春開催	秋開催
第1	4.3	4.0	4.6	4.4
第2	4.2	4.5	4.6	3.9
第3	4.0	4.0	4.6	4.1
第4	4.3	3.9	4.8	4.5

②プログラムの運営に関する参加者の主観的評価

プログラム運営に関する参加者の主観的評価は、22の内容が明らかになった。主観的評価の内容は、<会費は安い>、<会場は自宅に近く参加しやすい>、<時期は寒くない4月や10月がよい>、<昼食時間をとりたいので14時開始がよい>、<4回という回数は適当である>、<時間はもう少し長くてもよい>、<話し合いのグループをかえてセッション数を増やしてほしい>、<もう一方のグループの人とも話したい>、<今回の参加者で年に何回か集まりたい>、<年1回でも同窓会があると心強い>、<話し合いのグループはセッションの出席回数別がよい>、<2回のセッションが終了した時点でグループをかえてほしい>、<プログラムにリンパマッサージ等の実技を取り入れてほしい>、<スタッフは雰囲気がよくリラックスできる>、<入院中に医師や看護師からほっとカフェを紹介してほしい>等であった。

(3) 乳がん患者サポートグループプログラムの長期的な評価に関する調査

平成 22 年度に開催されたプログラム 2 回（春開催、秋開催）の参加者のうち、研究参加に同意が得られたのは 17 名であった。そのうち、ベースラインからプログラム終了 1 年後の 5 回の質問紙調査のうち、全て返送した 13 名を対象とし、データを分析した。プログラム参加時の平均年齢は 49.5 歳（30 歳代～60 歳代）、術式は乳房切除術が 9 名、乳房温存術が 3 名、ラジオ波熱凝固療法 1 名、平均術後経過年数は 22.5 ヶ月（2～181 ヶ月）であった。

1 年間の推移について、使用した既存の測定尺度のうち a. MAC（高得点：よい状態）、b. WHO SUBI（高得点：よい状態）、c. PTGIJ（高得点：よい状態）、e. がん患者の自己効力感尺度（高得点：低い状態）の変化を図示する。（図 1～図 4）。また、プログラム目的に見合う独自作成項目のうち 4 項目の変化（高得点：当てはまる）を図示する（図 5～図 8）。

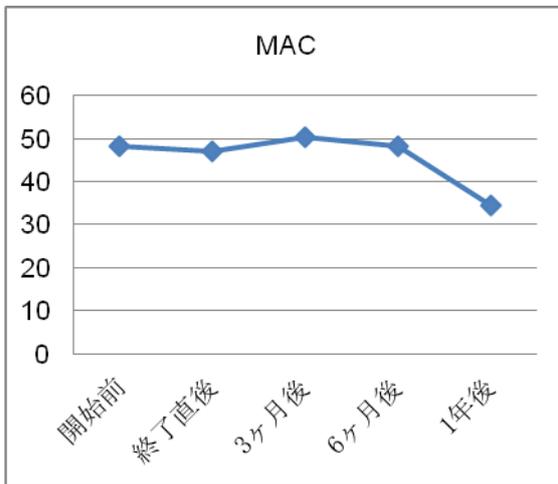


図 1：Mental Adjustment to Cancer scale の推移

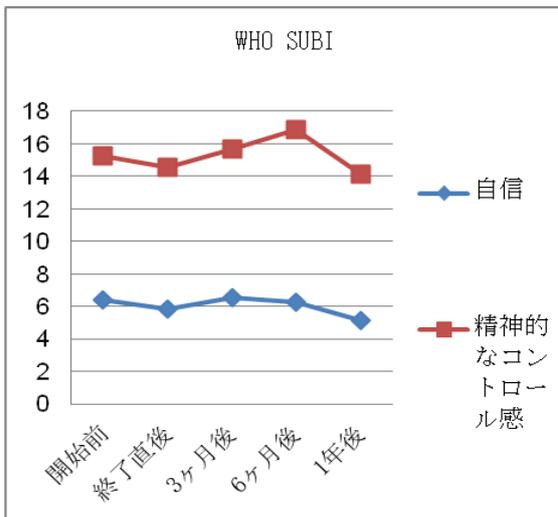


図 2：主観的健康感尺度（SUBI）の推移

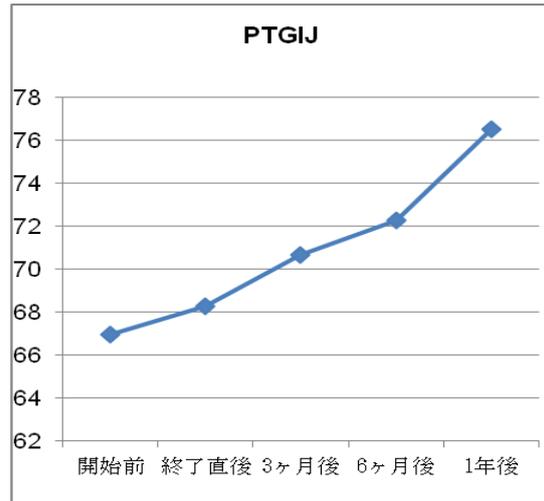


図 3：日本語版一外傷後成長尺度（PTGI）の推移

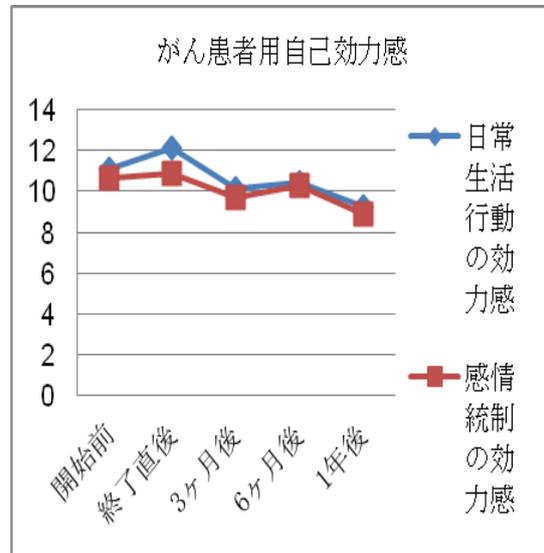


図 4：がん患者の自己効力感尺度の推移

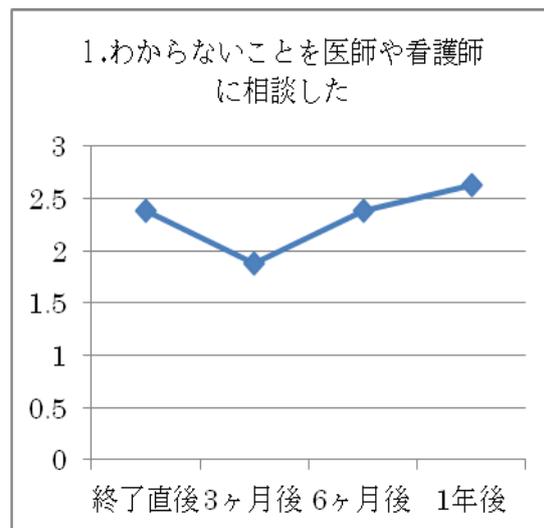


図 5：周囲の資源である医療者との関わり方の変化

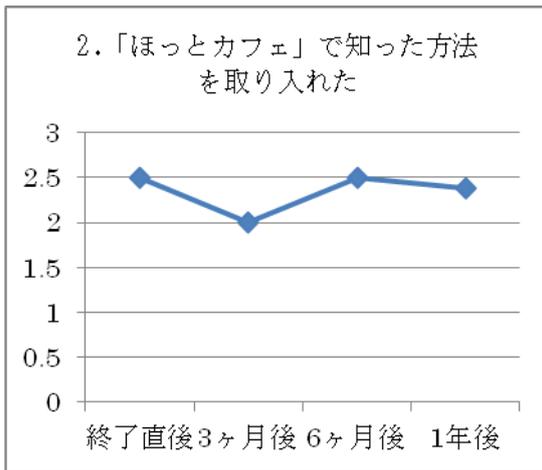


図 6：プログラム内容を実生活に取り入れることの変化

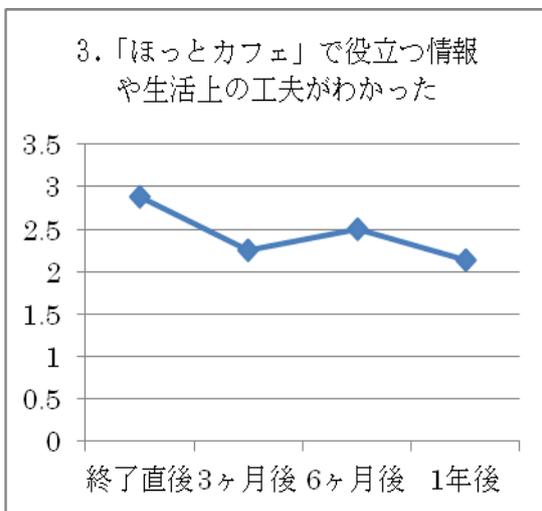


図 7：プログラム内容の実生活に役立つ情報や生活の工夫に関する理解の変化

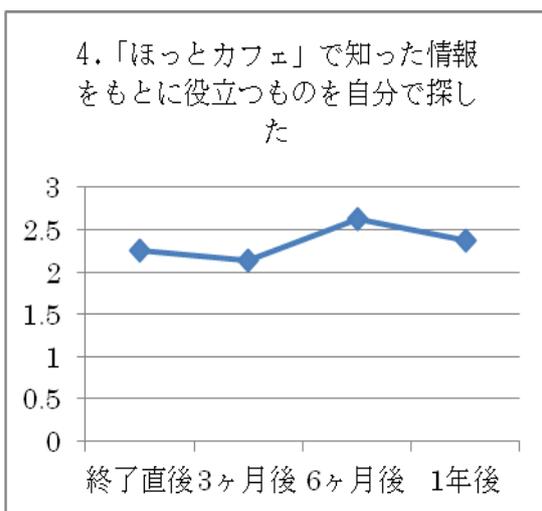


図 8：プログラム内容をもとにさらなる資源を獲得する行動の変化

(4) 乳がん患者サポートグループプログラムの運営者による評価

平成 22 年度秋開催の対象者 17 名のデータについて分析した。各セッションへの参加は、第 1～3 セッション各 7 名、第 4 セッション 8 名であった。対象者の「ほっとカフェ」の運営スタッフとしての経験は平均 3.9 年(1 年～7 年)、対象者の看護職経験は平均 17.2 年(4 年～33 年)であった。所属は、病院施設が 7 名、教育研究機関が 10 名であり、3 名ががん看護専門看護師、2 名はリンパドレナージセラピストの資格を有していた。

① 情報提供の場面における運営スタッフの実践内容

情報提供の場面では 10 の実践が明らかとなった。“情報提供”の場面における運営スタッフの実践内容として、＜提供する情報の取捨選択＞、＜有効な情報提供のための準備＞、＜有効な情報提供のための時間管理＞、＜情報提供が参加者に有益となるための工夫＞、＜情報提供をしながらの自己モニタリング＞、＜情報提供時の参加者の関心度や理解度の把握＞、＜参加者を引き付けるプレゼンテーション＞、＜スムーズなプログラム進行のための時間管理＞、＜情報提供過程への関心＞、＜情報提供時の参加者の気持ちの推察＞が明らかになった。

② 話し合いの場面における運営スタッフの実践内容

話し合いの場面では、24 の実践が明らかとなった。話し合いの場面における運営スタッフの実践内容として、＜参加者個人の思いや考えへの専心＞、＜セッションの目的にそった話し合いの展開＞、＜参加者間の相互作用における個人の思いや考えへの関心＞、＜参加者間の良好な関係づくりをめざした調整＞、＜グループの自律性を尊重したファシリテート＞、＜グループ全体での話し合いをめざした調整＞、＜ニーズに合わせた個別の援助＞、＜グループ編成に対する方針の説明＞、＜事前情報からのグループ特性の把握＞、＜非言語的コミュニケーションを用いたファシリテート＞、＜参加者個人の持てる力の把握と支持＞、＜ファシリテートしながらの自己モニタリング＞、＜ファシリテートの最中の省察＞、＜スムーズなプログラム進行をめざした時間管理＞、＜グループダイナミクスに対するモニタリング＞、＜話し合いの場とグループの創り出す雰囲気への感知＞、＜話し合い時の参加者の関心度や理解度の把握＞、＜参加者間の支持的関係形成の観察＞、＜グループダイナミクスの観察＞、＜グループダイナミクスへの関心＞、＜参加者の生きる力の感知＞、＜参加者個人の思いや考えへの関心＞、＜ファシリテーターの実践に対する関心＞、＜話し合いを促す関わり＞が明らかになった。

③運営全体における運営スタッフの実践内容
情報提供、話し合いのいずれの場面にも限定されない運営全体では、9の実践が明らかになった。運営全体における運営スタッフの実践内容として、〈参加者像のアセスメント〉、〈効果的なグループ編成〉、〈安心して快適な環境の創出〉、〈参加者間の支持的関係形成にむけた観察と配慮〉、〈参加者間の相互支援関係の育成〉、〈参加者の意向の尊重〉、〈プログラム目標に向けた他スタッフとの協働〉、〈スムーズなプログラム進行のための時間管理〉、〈マニュアルに沿った運営〉が明らかになった。

(5)乳がん患者サポートグループプログラムの構成要素と有効性に関する調査

視察先は、乳がん患者と家族のためのCancerKin (イングランド) およびがん患者と家族のための Maggie's Dundee (スコットランド) とした。視察で得た知見には、プログラムに必要な構成内容としてプログラム参加者の心身の状況ができるだけ類似するようなプログラム構成 (診断直後用、治療中用、再発後用、家族用等) を設定することが好ましいこと、プログラム有効性を評価するためには参加者が回答しやすく、かつ適切な評価が行えるツールを開発し、成果を蓄積していくこと等であった。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 8 件)

- ①岡本明美、佐藤まゆみ、大野朋加、荒堀有子、増島麻里子、渡邊美和、吉田千文、阿部恭子、楠潤子、長坂育代、土屋雅子、柴田純子、金澤麻衣子、奥朋子、菅原聡美：乳がん手術体験者のサポートグループ運営に対する主観的評価。第 26 回日本がん看護学会、2012 年 2 月 12 日、島根県。
- ②長坂育代、吉田千文、垣本看子、増島麻里子、瀬尾智美、岡本明美、渡邊美和、楠潤子、阿部恭子、佐藤まゆみ、西育子、奥朋子、神津三佳、金澤麻衣子、泰圓澄洋子：乳がんサポートグループの効果的なプログラム展開を目指した運営スタッフの実践。第 26 回日本がん看護学会、2012 年 2 月 12 日、島根県。
- ③渡邊美和、楠潤子、神津三佳、土屋雅子、西育子、増島麻里子、吉田千文、岡本明美、阿部恭子、佐藤まゆみ、長坂育代、瀬尾智美、柴田純子、笠谷美保、森田公美子：術後乳がん体験者のためのサポートグループの長期的効果の検討 - 「ほっとカフェ」参加者を対象として -、第 26 回日本がん看護学会、2012 年 2 月 11 日、島根県。
- ④増島麻里子、長坂育代、笠谷美保、土屋雅子、乳がん手術体験者のサポートグループにおける参加者の体験とプログラム構成

の検討、第 24 回日本がん看護学会学術集会、2010 年 2 月 14 日、静岡県。

- ⑤菅原聡美、奥朋子、浅井潤子、増島麻里子、乳がん手術体験者のサポートグループ修了後の「同窓会」における参加者の体験、第 24 回日本がん看護学会学術集会、2010 年 2 月 14 日、静岡県。
- ⑥西郁子、岡本明美、泰圓澄洋子、瀬尾智美、増島麻里子、乳がん手術体験者のサポートグループにおける参加者の体験とプログラム構成の検討 - 術後 1 年未満の者と術後 4 年以上の者との比較 -、第 24 回日本がん看護学会学術集会、2010 年 2 月 14 日、静岡県。
- ⑦渡邊美和、神津三佳、柴田純子、吉田千文、増島麻里子、乳がん手術体験者のサポートグループにおける参加者の体験とプログラム構成の検討 - リピーターに焦点をあてて -、第 24 回日本がん看護学会学術集会、2010 年 2 月 14 日、静岡県。
- ⑧阿部恭子、佐藤まゆみ、金澤麻衣子、増島麻里子、若年乳がん手術体験者のサポートグループにおける体験、第 24 回日本がん看護学会学術集会、2010 年 2 月 14 日、静岡県。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増島 麻里子 (MASUJIMA MARIKO)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：40323414

(2) 研究分担者

渡邊 美和 (WATANABE MIWA)
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号：90554600
浅井 潤子 (ASAI JUNKO)
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号：305546597
岡本 明美 (OKAMOTO AKEMI)
順天堂大学・医療看護学部・准教授
研究者番号：20456007
佐藤 まゆみ (SATO MAYUMI)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授
研究者番号：10251191
吉田 千文 (YOSHIDA CHIFUMI)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授
研究者番号：80258988
阿部 恭子 (ABE KYOKO)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授
研究者番号：00400820
長坂 育代 (NAGASAKA IKUYO)
千葉大学・大学院看護学研究科・特任講師
研究者番号：50346160 (平成 22 年度：研究協力者→平成 23 年度：研究分担者)